神論

第四章 創造

4. 1. 御父、御子、御霊なる神は（ヘブル1：２、ヨハネ1:2,3、ヨブ26:13,33:４）ご自分の永遠の力と知恵と善である栄光をお示しになるために（ロマ1:20、エレミヤ10:12、詩104:24,33:5,6）。初めから何もないところから世界とその中にあるすべてのもの、見えるものと目に見えない物を六日の間、創造することを喜びとし、すべてがはなはだ宜しいとされました（創1:1-31、ヘブル11:3、コロサイ1:16、使徒17:24）。

創造の働きは三位・神の共同の働きです。御父（1コリント8:6）、御子（ヨハネ1:2,3）、聖霊（創1:2、ヨブ26:13）神性を現わす働きには、三位の神が等々に参与されました。創造は、神の栄光を説教します。4章1項において、何もないところからすべてが造られたことを強調していますが、これは、ソッツィー二主義の誤りを示すためです。ソッツィー二主義者たちは、既に存在していた物質から世界が造られたと主張しました。一方、１項において、六日創造を明らかにしていますが、これに対して今日にも、科学的資料を持ち色々な方式で解釈しようとする試みがあります。しかし最近、アメリカ長老教会（PCA ）の場合は、六日創造と確定しました。

４.2. 神は、他のすべての被造物を造られた以降に、人間を男と女とに創造し（創 1:27）、理性的で不滅的な霊魂を与え（創 2:7、伝道書 12:7、ルカ 23:43、マタイ 10:28）、ご自身の形に従って（創 1:26、コロサイ 3:10、エペソ 4:24）、知識と義と真の聖さを付与なさいました。彼らの心に神の律法を記録させ（ロマ 2:14,15）、その律法を成就させる力も与えました（伝道書 7:29）。ところが彼らは、罪を犯せる可能性の下にいましたが、彼らの意志は自由があり、意志が変わる余地がありました（創 3:6、伝道書 7:29）。彼らは心に書き記された律法以外に、善悪を知るようにさせる木の実を取って食べてはならないという命令を受けました（創 2:17、創 3:８-11,23）。彼らがこの命令に従順する限り、神と交わりながら幸せを味わい、すべての被造物を支配できました（創 1:26,28）。

創造にあって、創造主と被造物との区別は、私たちを常に謙遜にさせます。そして人間を男と女とに造られたとは結婚の重要性を語ってくれます。2 項において、神の形で造られたというのは、知識と義と聖さが付与されたという意味です。自由意志は本性の光と聖さの性向に従って機能を発揮することができました。アダムとエバは自発的に神の命令を充分に守ることができ、神の命令を守る限り幸せな生活を営むことができました。

本項において、神の法が人間の心に明瞭に、確かに刻まれていたことを語っています（ロマ 2:14,15）。アダムが罪に陥る前に、律法に対する知識は完全かつ広範囲なものであって、神は、道徳法を守れる力も与えたことをはっきりしています。これは、十戒が心に刻まれていることを意味しています。ウェストミンスター総会員たちに、神学的にこのような解釈ができるように影響を与えた神学者としてトマス・カートライトとジェームズ・アッシャを挙げることができます。まずトマス・カートライトは、モーセに与えられた律法が、創造の時

にアダムとエバの心に同一に記録されたことと語りました。[86] ジェームズ・アッシャは、第一の父母であるアダムとエバが善悪を知るようにさせる木の実を食べた時、十戒を犯したことだと説明しました。

神に不忠誠だったことが第一の戒めを破り、全能なる神の声を聞くより妻の声と悪魔の言葉を受け入れたことが第二の戒めを破ったことだと見ました。アッシャは、アダムとエバが傲慢になって、神の真理に対して異議を提起し、神の敵と交際したのが第三の戒めを犯したことだと理解し、善悪を知るようにさせる木の実を食べてはならないという命令を、礼典と見て、戒めを破ったことは、礼拝の戒めである第四の戒めを犯してことだと述べました。神の声より妻の声を聞いたことは第五の戒めを破ったこと、自分たちの犯罪によって自分たちは勿論で、すべての子孫たちを死に至らせたので、第六の戒めを破り、情欲という感情は第７の戒めを犯したこと、現在の状態に自足せず、実を食べたことは第八の戒めを破ったこと、神に対する偽りの告訴を受け入れたことは第九の戒めを破ったこととし、悪魔の提案に悪い情欲を抱いたことは、第十の戒めを破ったことだと述べました。[87]

２項の始めから、霊魂不滅性についてはっきりしています。その当時の再洗礼派とアルミニウス主義者の中には、人間の霊魂は死と復活の間に、霊魂は眠っていると主張しますが、それが誤りだというのを示そうとしました。また、新約聖書でも、サドガイ人は霊魂滅絶説を主張したのですが、現代福音主義者の中にも、霊魂滅絶説を主張する者たちがいます。これもやはり誤りです。

---

86 トマス・カートライト、キリスト教総論（金チフン訳）（ソウル：新バンポー教会出版、2017）

87 James Ussher, *A body of divinity*(Herdon:SGBC, repint 2007), 19-120